

場所をもたない調査空間

——匿名的な親密さとインタビュー

圓田 浩二*

■要 旨

本稿の目的は、私が「匿名的關係性を維持したインタビュー」と名づけた調査経験をもとに、社会調査と場所の關係について考察することにある。インタビュー対象者は援助交際の当事者や摂食障害者である女性・男性である。インタビュー調査は特定の場所をもたず、多くが1回きりでインフォーマントのプライバシーが保護される形式で行われた。インフォーマントの動機を整理すると、話すことの快感、社会や誰かの役に立つこと、自分の過去と現在の整理、調査という行為への興味・関心の四つに分類できる。つまり、このインタビュー方法は日常の社会空間では語ることでできない経験をもつ人々に有効な調査方法と言えるだろう。インタビュー空間では、「匿名的な親密さ」と呼ばれる調査者とインフォーマントとの關係性が誕生し、それを利用する形でインタビューというコミュニケーションが展開される。またこのインタビューの特徴は、時として、擬似性交のようなエロ的なコミュニケーションに発展する。これらの議論から、匿名性を維持したインタビュー調査は社会調査の手法として有効であると考えられる。その理由は、特定の場所をもたない点と、相手の生活空間に踏み込まないという形でのプライバシーの保護という点、ある社会現象の判断に関する境界線が曖昧になってグレーゾーンが多くなり当事者にとって他者の意見を秘密裏に求めたいという要望に役立てる点、この三点においてである。

キーワード：フィールドワーク、インタビュー調査、匿名的な親密さ、擬似性交としてのインタビュー

*沖縄大学

1 匿名的關係性を維持したインタビュー

本稿の目的は、私が「匿名的關係性を維持したインタビュー」と名づけた調査経験をもとに、社会調査と場所の關係について考察することにある。ここで「私」が指し示すものは、30代前半の男性というジェンダーとセクシュアリティをもった社会学を専攻する調査者のことである。

私が行ってきたインタビュー対象者の多くは、援助交際の当事者や摂食障害者である女性・男性である。調査方法は、テレフォン・クラブや伝言ダイヤルなどの電話風俗や個人情報雑誌、インターネットのホームページなどを通して出会い、インタビューを行った者がほとんどである。インタビュー場所は、カラオケボックス、相手の部屋、公園のベンチ、車の中、マンガ喫茶の個室の中など、とりあえず第三者に話が漏れない場所を選択した。これらの場所は、この場所やフィールドではなくてはならないという「場所」ではなく、その時の状況によって偶発的に選択された場所である。例えば、東京・池袋駅で待ち合わせをして、とりあえず第三者に話が漏れない場所を選択する。こうして、近くにあるカラオケボックスやマンガ喫茶の個室が利用される。もしその場所が地方ならば、公園のベンチや車の中がインタビュー場所として選択される。それゆえに、私の社会調査は、従来の社会調査やフィールドワークと違った「場所」をもつ。もし適当な表現を探すならば、「非場所的」社会調査と言えるかもしれない。

またインタビュー調査の手續きについて述べると、これらの調査は、調査者がその社会的身分と本名を明らかにした上で、インフォーマントの本名や具体的な所属先、連絡先は尋ねないことを前提に行われた。その上で以下の三つの操作を経て、調査は行われている。①調査したい現象に関して、当事者もしくは関係者と自認する人々が、②自発的にインタビューに応じることがインフォーマントの条件となる。データ処理に関しては、③インタビューはテープ録音を目的とした非指示的面接（non-directive interview）で、テープ内容のリライトを経て、データとして利用される。

また、研究対象の性質から、一回きりのインタビューが多く、また性別も

女性が多い。中には、何度もインタビューしたケースもあるが、基本的には、匿名的な関係性を維持し、当事者の生活空間に立ち入ることはない。知っているのは、携帯番号やメール・アドレスのみというケースが大部分を占める。したがって、インタビュー後こちらから連絡を取るケースはほとんどないが、半年後や一年後はどうなっているのだろうと思って、連絡を取ろうとすると取れないケースがほとんどである。

このような調査方法であるから、相手の素性に関しては、どこの誰で何歳かも正確にはわからない。学生証や免許証などの身分証明書の提示を求め、確認することはないからである。この調査方法で集められたインタビューは既に百件を超えている。

この調査方法は、現在沖縄県の小さな離島村で行っているフィールドワークとは全く異なっていると実感している。離島村のフィールドワークにおけるインタビュー調査とは違うというこの感覚はどこから来るのだろうか？ ちなみに、このフィールドワークは、3年前から、「ダイビングの島」と呼ばれる人口1000人ほどの座間味村という島々において行われている。この調査は、島のダイビング産業の発展と、島の人々と本土からの移住者との関係に主眼を置いている。本土からの移住者たちが島にダイビングを持ち込み、その後多くの本土からの移住者がダイビングに参入し、過疎の村であった座間味村を「ダイビングの島」と呼ばれるまでに発展させた。そこで明らかにしたい問題は、島の人々「シマンチュー」と本土からの移住者「ナイチャー」との関係や、地域社会や文化の変容である。

そこで、本稿では、援助交際の当事者や摂食障害者へのインタビュー調査を再検討する形で、匿名的な関係性を維持した社会調査の利点と欠点とについて、調査方法論として考察を行いたい。

2 匿名的な親密さとフィールドワーク

2.1 社会調査における関係性

社会調査は調査者だけでは成り立たない。調査方法と調査対象が必要とな

る。そして、調査対象と調査者とがどのような関係を結ぶのかはとても重要なことになる。

私が行っている・きた援助交際と摂食障害に対する社会調査では、主にインフォーマントとどのような形で出会うかという点に、その特徴がある。インタビューは、匿名的な関係のもとで行われてきた。この調査の特徴は、一言で言えば、インフォーマントの生活空間に立ち入らないという点にあると考えられる。

逆に、現在沖縄県の離島で行っているダイビングの調査は離島村という社会空間に入り、インフォーマントの生活空間に入っていく行為である。当然、調査活動を通して、島の人間関係のもつ利害関係やその歴史について話が及ぶことがある。特に、その離島村は島の人（シマンチュー）と本土からの移住者（ナイチャー）が混在し、人間関係が複雑である。最初は、表面的な話しか聞かれなかったが、三年目にもなると、島全体の社会空間の温度差、微妙な人間関係がなんとなく雰囲気としてつかめてくる。

援助交際や摂食障害に対する社会調査と、ダイビングの調査とでは何が違うのだろうか？ 答えは、調査対象と調査者とが結ぶ関係性にある。特に、インフォーマントや調査対象者、被調査者が調査活動に応じる、協力することによって、受け取る利点と欠点にあるように考えられる。

離島村でのダイビングの調査では、インフォーマントたちは感情的になったり、深刻な悩みを打ち明けたりすることはなく、当たり障りのない話が多かった。きっとこの点では苦勞したり、何か一悶着あったのだろうと思われるエピソードでも、私が訊きたいことがさらっと流されてしまうような印象をもった。もしかしたらその種の情報を得ようとするならば、何度も足を運んだり、定住したりして、顔なじみとなったり、地域の一員と見なされる手続が必要なのかもしれない。

この点について、調査者とインフォーマントとの間で築かれる信頼関係、つまりラポールが足りないと言ってしまえば、そう解釈できるかもしれないが、事態は異なっているように感じられる。それは、ラポール論ではなく、調査対象と調査者とが結ぶ関係性、つまり、もとをただせば社会調査と場所

のあり方の違いなのだと考えられる。

2.2 匿名的な親密さ

匿名的な関係のもとでのインタビューでは、ラポールではなく、私が「匿名的な親密さ」[圓田, 2001 a: 186]と呼ぶ現象が生じる。匿名的な親密さとは、私が行った援助交際と摂食障害に対する社会調査から抽出した概念である。しかし、この概念は何も私の調査にのみ有効な概念ではなく、広く応用可能な範囲をもつ概念でもある。

「あらゆる人びとが、相接し相交わりながら、互いに未知であるというところに、都市生活の特徴がある」[Park, 1916=1965: 78]と述べられているように、現代社会は人口の大部分が都市に集中し、通りを行き交い、電車に乗り合わせて近接しながらも、お互いが未知であり、ストレンジャーであることに特徴がある。都市という社会空間においては、人々是对面的かもしれないが、人格の交流はなく、非人格的な関係にあり、この意味においてストレンジャーであると考えることができる。ゴッフマンが明らかにしたように、都市という空間に参入する個人は「儀礼的な無関心」という作法を身につけ、互いが互いの人格を傷つけないように常に注意を払っている[Goffman, 1963=1980]。

その際人々は、他者を典型的に把握する。「サラリーマン」、「女子大生」、「小学生」といったように、一般化された他者として理解し、その行動や性格を予測する。「日常生活の現実には対面的な出会いの場においてそれを用いて他者が理解され、〈とり扱われ〉る、典型的な図式が含まれている。こうして、たとえば私はある人を〈男〉として、〈ヨーロッパ人〉として、あるいはまた〈買い手〉とか〈陽気な型の人間〉として理解する。類型化されたすべてのこうした図式は、関係がすすむにしたがって、彼との間の私の相互作用のあり方を決定する」[Berger & Luckmann, 1966=1977: 52]。こうして、最初の時点では典型的にとらえられた他者は、コミュニケーションの頻度が増すに連れて、具体的な他者、ある特定の個性をもった他者となる。

私が行った援助交際と摂食障害に対する社会調査は、匿名的な関係を、つ

まり一般化された他者の類型を維持したまま、行われる。私から見れば、「援助交際を行っている女子高校生」や「摂食障害をわずらっている女子大生」、インフォーマントから見れば、「インタビューを希望している男性や大学院生、大学教員」となる。そのため、調査者とインフォーマントとの出会い＝調査は、偶然的・偶発的なものとなる。たまたま伝言ダイヤルでメッセージを聞いた、雑誌でインタビュー募集記事を読んだなど、偶然性に負うところが多い。

そして、この関係を維持したまま行われるインタビューは独自の特性をもつものとなる。匿名的な関係性を維持した社会調査では従来の調査論で言われていた「ラポール」ではなく、「匿名的な親密さ」が必要となる。それは一言で言えば、親密な相手にはではなく、「知らない人だから話することができる」というコミュニケーションである。それを支えているのが、対人的な関係をともなった人格的信頼ではなく、ある特定の名称や属性をもったシステムや人物に対する緩やかな信用なのである。この信用は、このシステムや人物はきっとこのように行動する、振る舞うだろうという期待である。そして、この信用と匿名性が合わさった時、「匿名的な親密さ」が生じる。そして、スティグマをもっていたり、社会的に否定的な評価を与えられているマイノリティたちなど、ある社会的属性をもつ他者は、家族や恋人などの一般的に親密な関係をもつ人々には開示できないような話題をもつ。また一般の人々でも、身近な他者には言えないようなセクシュアリティの問題や秘密をもつ場合がある。

私たちが日常社会で、自分の役割や相手の身分によってコミュニケーションを使い分けているように、匿名的な関係の保つコミュニケーションは現代社会においてそれなりの意義をもつことになる。つまり知らない人だから話せるコミュニケーションが存在すると考えられる。「匿名的な親密さ」は、匿名的な関係性のもとで築かれるコミュニケーションの特質を表現している。例えば、インターネットやチャット、電子メールにおいてはお互いのプライバシーに深入りせずに、ある種の親密なコミュニケーションを行うことができる。これをインタビュー調査に利用したのが私の社会調査であった。

2.3 告白的共感

お互いがストレンジャーである利点は、客観的にお互いが自己や事件を考え、物語れる点にある。A. シュッツはこのストレンジャーのもたらす客観性を、W. I. トーマスの言葉を借りて以下のように表現する。「他^{よそもの}所者はまず、状況を規定しなければならない」[Schutz, 1964=1991: 19]。つまり、互いがストレンジャーである者同士のコミュニケーションは、互いに距離感を保ちながら相手を理解しようと努めるために、コミュニケーションが円滑に進むならば、独特の親密さを帯びることになる。この親密さは次の諸条件によって成立すると考えられる。

匿名的な親密さが生じる条件は、お互いにストレンジャーであり、匿名的な関係が守られ、お互いの生活空間に立ち入らないことにある。この条件下のインタビューでは、相手のセクシュアリティやトラウマなど、通常^{通常}の他者=生活空間の中の人々には語り得ないような話題を聞き出せたり、インフォーマント側からそのような話題が自発的に提供されたりする。

この匿名的なコミュニケーションによって生じる自己開示を、社会学者の G. ジンメルは「告白的共感 *confessional rapport*」と名付けている。この概念は、ストレンジャーには、時として、同じ生活空間に存在する人々には語り得ないような話題が提供される事態を指している。ジンメルはこの現象について次のように述べている。「また異郷人の客観性と関連するのが、以前にふれた現象、もっぱらではないにせよたしかに主として旅を続ける者に妥当する現象である。すなわちそれは、しばしば彼には驚くべき率直さと告白が、いっさいの近い関係者には慎重に保留される懺悔への性格に達するまでに示されるということである」[Simmel, 1908=1994: 287]。

同様に、1920年代に合衆国の都市シカゴで活躍した社会学者の P. クレシーがストレンジャーについて述べるように、「匿名の人物は本質的に脱道徳な人である」[Cressey, 1983: 112]。匿名的なコミュニケーションの内容は、通常^{通常}の道徳規範から離れるため、話題の選択や価値判断が通常とは大きく異なる傾向を有する。それゆえ、告白的共感という現象が生じると考えられる。この匿名的なコミュニケーションにおいては、ある種の親密さが生じ

ることで、家族や友人、あるいは公的な場面においてタブーとされる話題、性や犯罪、病気、死といった事柄についてのコミュニケーションが選択される機会が多いと考えられる。このコミュニケーションの開示をもたらすものが「匿名的な親密さ」である。

また、クレッシーは「社会学的ストレンジャー」という概念を提起している。彼は、調査者と調査対象者の双方が匿名性を維持した上で行う質的な社会調査において、二種類の調査者類型が存在すると述べている [Cressey, 1983]。一つは社会学的ストレンジャー (sociological stranger) であり、もう一つは匿名的ストレンジャー (anonymous stranger) である。社会学的ストレンジャーとは地位をもったストレンジャー、あるいはカテゴリー化されたストレンジャーとされる調査者の類型である。これには、医師や弁護士、ソーシャルワーカーといった社会的地位が調査対象者より上位にある人々や、逆に下位にあるとされる、ユダヤ人や黒人といった人種のカテゴリーをもつ人々、あるいは市長のような重要な地位についている人々に話を聞く学生が該当する。また、匿名的ストレンジャーとはお互いの素性を明かさず、例えば酒場で偶然知り合って話すといった場合の調査者の類型を指す。

私が行ったインタビュー方法は、クレッシーの社会学的ストレンジャーと匿名的ストレンジャーとの両方の特徴を有する。私の調査では、調査者である私の身分証の提示はもちろんのこと、調査の意図、その業績などを見せてインタビューの許可を求めるが、相手にはそのような身分証の提示は求めない。最初に聞くのは、年齢、住所、家族構成、学歴、職歴ぐらいで、それらを確認する書類や証拠もない状態でインタビューは始まる。インフォーマントには、そのプライバシーが守られる、つまり第三者に聞かれることがない場所で、後はできるだけ自由な形でその人の言葉で話をしてもらいだけである。

「大都市の大部分の人びとは何か大きなホテルで生活している人びとのように、互いに顔を合わせるが相手がどんな人かを知らずに生活している。その結果、より小さな地域社会にみられるような親密で永久的な結合は、偶然的・因果的關係へと変化する」 [Park, 1916=1965: 91]。近代社会が成熟し

てくると、都市型社会となり、日常生活で出会う大部分の人々とは匿名的な関係となる。誰も、毎日同じ時間、同じ車両に乗り合わせている人々と親密な関係を築こうとは思わない。このような社会でこそ、匿名的な関係性を維持した社会調査の可能性が開かれると考えられる。

3 インフォーマントの動機

私のインタビューに応じてくれるインフォーマントはどのような動機や期待を抱いてやってくるのか？ そこに、匿名的な関係性のもとでのインタビュー調査の可能性があるように思われる。それには四つのタイプが存在する。①話すことの快感、②社会や誰かの役に立つこと、③自分の過去と現在の整理、④調査という行為への興味・関心の四つである。それぞれ順に見ていこう。

インタビューそのものは、多くの場合、「普通の会話だなと思って。だから、普通の会話、普通にしゃべってた」（アオイ、2002. 8. 12、22歳、アルバイト）と、普通の会話形式に近いものである。私が「話しやすかった？」と尋ねると、「うん、インタビューという感じではなかった」と語る。もちろん、そううまくいかないケースも存在する。

3.1 話すことの快感

ふだん他者に話すことができないような事柄を、インタビューしたいと言ってきた「社会学者」と名乗る男に語る。会ってインタビューしてみると、彼女／彼らはしばしば話したい、話したかったという欲望を口にする。

「あんまりこういうこと、ほんとにしゃべらないから、しゃべれると気持ちすがすっきりしますよね」

（アオイ、2002. 8. 12、22歳、アルバイト）

「やっぱりしゃべると、やっぱりしゃべりたいんですね。自分のことって。でも、しゃべる相手がないから．．．」

(ミカ、2002. 10. 8、21 歳、無職)

「人に話すっていうのは一つ快感ではあるよね」

(ワタナベ、2004. 6. 19、45 歳、会社経営)

話すことの快感とは、通常の彼女／彼の生活空間では決して公言できないようなことを、自分が所属している生活空間とは全く別の社会空間からやってきたストレンジャーに話す、ストレンジャーだから話せることに由来する。その話すことへと、逡巡しつつも駆り立てるものは「インタビュー」や「社会調査」を、あなたに対して行いたいという「社会学者」と名乗るストレンジャーへの確固としたものではないが、四番目とも少し関連するが、緩やかな信用なのである。

3.2 社会や誰かの役に立つこと

社会や誰かの役に立つこととは、インフォーマントがインタビューに応じることで、結果として、社会や同じような問題を抱えた人々への貢献を、インフォーマント自身が意図としているケースである。

「自分のことが何かの役に立てばいいかなと思っています」

(マユ、2002. 10. 11、31 歳、専業主婦)

彼女とは雑誌を通じて知り合い、田舎のショッピング・モールの駐車場の中で摂食障害者へのインタビューが行われた。インタビュー中に、過去のセクシャリティの話題に及ぶと、過去には援助交際の経験もあったことがわかった。彼女がインタビューに応じた動機は、上に見たように「自分のことが何かの役に立てばいいかな」という、漠然としたものである。しかし、このタイプのインフォーマントには何十人も会ってきている。

私たち社会学者が社会調査を行い、その結果を還元して、「もし可能ならば、社会やある特定の人たちに役立てば」と思っているのと同様に、インフォーマントも同じような感覚をもっている。摂食障害者や援助交際の当事者

のように、ふだん公共の場で語ることのできない人々にとっては、苦しんだり、悩んだり、トラブルにあったりしている分だけ、一般のインフォーマントよりもこの気持ちは強いかもしれない。

3.3 自分の過去と現在の整理

自分の過去と現在の整理とは、インタビューにおいて質問を投げかけられ、時に説明や意見を求められたりすることがしばしば存在する。この過程で、インタビューというコミュニケーションを行っている間に、インフォーマントの心の整理がついたり、頭のなかの疑問が解けていく場合がある。

「しゃべっているうちに、『あら?』ってなんかちょっと気づきそうな、気づかないような、こともあった」

(アオイ、2003. 2. 14、22 歳、アルバイト)

「しゃべることで自分の中で整理ができるから、こんだけやっぱりね、自分のやっていることを人に話すっていうことがないから、それって、なんか頭の中で、自分の中で、いろいろ整理ができたんじゃないかな」

(アヤカ、2003. 11. 15、18 歳、専門学校生)

匿名的な他者とのインタビューの場合、調査者は自分の生活空間の外にいるストレンジャーであるため、その調査者を信用することができたならば、その後のことを心配せずに話すことができる。それに、調査者は自分が抱えている疑問を直接、インフォーマントにぶつけていくので、彼女／彼らが忘れていたこと、気づかなかったことを、思い起こさせ、現在の自己につなげていく。これが自分の過去と現在の整理である。

3.4 調査という行為への興味・関心

「まあ変わったこともあるもんだ、みたいな感じ。変な感じ」

(ヒナ、2003. 12. 22、16 歳、高校生)

ヒナは援助交際を行っている女子高校生であるが、彼女は私が行った「援助交際者へのインタビュー」を上のように評価する。出会い系サイトの掲示板に、援助交際のインタビューをしたい旨の書き込みをする。これ自体が変わったメッセージである。「なんかおもしろそう」とか、「取材ってどんなの?」という返事が返ってくる。ヒナ以外にも、同じような感想を述べた者が何人もいた。現代日本社会が複雑化し、自分の知らない人、場所、コミュニケーションが多くなり、不透明感が増す中で、非日常性という観点から社会調査という行為に興味を抱く人々が存在する。彼女／彼らにとって、社会調査という行為は「変わったこと」、「なんかおもしろそうな」という非日常性を帯びることになる。これが四番目の、調査という行為への興味・関心である。

これらの点から、社会調査という実践は今後必要とされ、評価されていくべきだろう。

4 社会調査と場所

4.1 擬似性交としてのインタビュー

援助交際や摂食障害のようなジェンダーやセクシュアリティに関わるインタビューは、匿名的な関係性を維持している場合、時として性的な要素が表出することがある。これは「男」と「女」の密室でのやりとりから生まれるものである。おそらく女性の調査者が摂食障害者（ほとんどが女性）にインタビューする場合には見られない現象である。「調査者」と名乗っている「男」の私が本当に社会学者である保証はどこにもない。最後の事例で述べるように、「社会学者」や「社会調査」、「インタビュー」を名目に、女性を誘い出し、いかがわしい行為を目的としているかもしれない可能性は十分にある。

この点において、匿名性を維持したインタビューは独特なコミュニケーション空間をもつことになる。それは親密圏の形成である。インタビューの場所は、ほとんどの場合、男女二人だけの密室空間であり、他者の侵入を防ぐ

プライベート空間でもある。そして、インタビューを首尾よく行っていくためには二人だけの親密さを演出をする必要がある。そして、インタビュー形式は、カラオケボックスやマンガ喫茶の個室の場合、カウンセリングルームで取られるような席取り、つまり相手に対して九十度に座り、相手との視線を交わすようにして座る。公園や車の中では、真横に座る。つまり、相手と対面せず、相手の視線を直視しないように配慮して席取りをする。これはただでさえ、調査やインタビューという行為に不安や緊張感を抱いているインフォーマントに、無用なプレッシャーを与えないようにする工夫・配慮でもある。

このようなコミュニケーション空間は、電話というメディアがもつコミュニケーション特性に近いものがある。電話は、身体的に離れている者同士が声によってのみコミュニケーションを行うメディアである。しかし、電話は、耳元でささやき、話者に完全な参加を要求し、双方向のコミュニケーションを行わせるメディアでもある。そのため、電話独特の親密な空間が誕生する [吉見ほか, 1992]。

1985年に東京の新宿に誕生したテレフォン・クラブは当初、素人同士がテレフォン・セックスを行うためのメディアであった。これは、電話というメディアのもつ独特の親密なコミュニケーション空間の特性を利用したもので、テレフォン・クラブは大流行する。テレフォン・クラブは、耳元でささやきながらも、異性の相手が本当は誰だかわからないため、恥じらいを捨て、親密さを作り出し、性的なコミュニケーションへの欲望や想像力をかき立てることができた。

私が行っていた調査事例でも、これと似た現象が見られることがあった。社会調査は、基本的に失礼で暴力的である。「記述の強要」や「話すことの強要」をインフォーマントや調査協力者に、時として強制してしまうからである。

私の調査の場合、調査研究対象の性質、匿名性の維持、インタビューの形式という三点の特徴から、電話のコミュニケーションに見られるようなエロシ性が時として表出する。インタビューは、耳元でささやきながらも、相手

が本当は誰だかわからないため、恥じらいを捨て、親密さを作り出し、過去の経験を再体験させる場合がある。時として、調査のもつ暴力性がエロス性に転じるケースが存在する。このエロス性が最も表出されたサホ（仮名）の事例を見てみよう。

サホ：ご飯、買いに出たんですよね。一時半頃。夜のセブンイレブンまで、歩いていったんですよね。自宅から5分とかかかないとこなんですよ。買いに行って、お弁当買って、帰りにやられた。

筆者：車で来た？

サホ：車で来た人にばあーっと。

筆者：車の中に？

サホ：でも、別にそういう対象なんやな、良かったって思ったところがあつたはず。絶対あつたはず。

筆者：電車の中で痴漢にあつて、一瞬ほっとする人もいるらしい。

サホ：私もするな。

筆者：自分が性的な対象だと？

サホ：そうそう。メチャメチャ痴漢に遭いますもん。ちっちゃい時から。

筆者：車の中に連れ込まれて、やられてしまった？

サホ：やられてしまった。

筆者：その後、どうなったの？

サホ：「どうなった」って、どういうことですか？

筆者：相手の車のナンバーを覚えているとか？

サホ：覚えていない。覚えてないし、なんか連れ込まれてぜんぜん普通のおっさんやったし。でも、あの人が一番気持ちよかつたな。

筆者：レイプが？

サホ：うん。

筆者：何が気持ちよかつた？ シチュエーションが気持ちよかつた？

サホ：いや。

筆者：レイプされているっていう……

サホ：いや、たぶんうまかった。一番たぶん。

筆者：車の中で、声あげてイッていた？

サホ：たぶん。

筆者：それはそれでおもしろいかもしれないな？

サホ：なんかね、たぶん、レイプなんだけど、心理的には、私にとってレイプじゃなかった。しかも、家に帰ったら、五千円札がガァーと入っておったから。

筆者：一応、五千円で。

サホ：っていうことやったんかな、「はぁーん」って。

筆者：じゃ、レイプじゃないかもしれない。

サホ：なんか愛人契約結んでくれみたいなこと言われたし、その時はまだ「援助交際なんて」っていうみたいな感じやったから、無視して帰ってきたけど。あと、「パンツ売ってくれ」とか、そう、その人が。

筆者：家まで送ってくれた？

サホ：いや、途中で降ろされた。そのつかまった所で降ろされた。

筆者：それが一番気持ちよかった？

サホ：気持ちよかったなあ。

筆者：普通のセックスやったんやろう？

サホ：普通でした。

筆者：ゴムも付けずに。

サホ：付けさせた、私が。

筆者：そうなの？

サホ：その時、けっこう……

筆者：レイプじゃないかもしれない？

サホ：浮気バンバンやってたんですよね。ゴム持ち歩いておかんと、こう、いつ何が起るかわからん状況に、私が遭っていて、だからもう中絶はしたくないんですよね。さすがに。だから、何かあったら、いつでも OK って言うために、ゴムを持ち歩いてたん

ですよね。だから、逃げようとしたんですけど、殴られたんです。だから、レイプかな。で、殴らないでくれ、殴られたら、一応女なので、怖いですよね。萎縮するし。「もう逃げないから、お願いだから、付けてくれ」って、頼んだんですよ。

筆者：じゃあ、付けてくれた？

サホ：付けてくれた。

筆者：それも変やな？

サホ：でも、フェラチオせえみみたいな。フェラチオあんまりする気なかったんですけど、それで逃げようとしたら、パシッと髪の毛をガァと掴まれて、微妙にレイプですよね。でも気持ちよかったなあ。だからなんだろう、痴漢の再体験なのかな、わかんないけど。多いんですよ、とにかく痴漢に遭うのが。一つ私が誘っているかもしれない、無意識的に。

(サホ、2001. 12. 1、23歳、大学生)

サホとの出会いは、私の著書〔圓田、2001 a〕を読んで、メールを送ってくれたことから始まる。会ってインタビューしたのは2001年末のことである。彼女は九州地方出身で、親元を離れ、地方国立大の大学生で彼氏と同居していた。彼女は9月から1ヶ月間だけ、携帯電話の出会い系サイトを利用して援助交際を行った。援助交際で会った男性は5、6人である。すべて一回きり会っただけの援助交際で、金額は三万円と決め、値切られたことは一回だけある。

サホはさまざまなセクシュアリティに関する問題を抱えていた。援助交際、レイプ、浮気症、中絶、痴漢の体験、小学校低学年時代の記憶のない空白の時間（性交があったと思われる）、自分の容姿に関する否定的評価。そして、父親の浮気やイジメ、自己評価の低さなどの個人的な問題。彼女にとって、援助交際は快樂の手段であり、女性としての魅力確認の手段であり、男への「復讐」、「客」に買われる「商品」となることでの人格を捨てるという自罰行為でもあった。

このインタビュー事例はサホがインタビュー中に突然思い出したレイプの話である。読者は彼女の受けた性的行為をレイプと判断するだろうか？ しないだろうか？ これは結果的に、彼女は買春されたのだろうか？ されていないのだろうか？ 売春したのだろうか？ していないのだろうか？ 読者は彼女を「普通の女性」というカテゴリーとして見ることができるだろうか？ 見ることができないだろうか？

さまざまな疑問が浮かぶが、ここで強調したいのは今まで行ってきた性交で一番「気持ちよかった」と三度も感想を漏らしている点である。サホは明らかにインタビュー時に「レイプ体験」を再体験し、その時の彼女の顔には、その時に感じていただろうエクスタシーが表出されていた。私がインタビューを行ったインフォーマントの中にはレイプ体験を語る者もいる。その数は20人近く存在する。しかし、彼女たちの中にレイプ体験を肯定的にとらえる者はいなかったし、ましてやサホのように「気持ちよかった」と語ったのは彼女一人だけである。「気持ちよかった」と語らせたのは、匿名的關係を維持したインタビュー空間とインタビュー者としての「私」とのコミュニケーションである。そして、これは社会調査のもつ暴力性がエロス性に転じるケースである。結果的に、サホにとって、私とのインタビューはレイプを再体験させる事態となった。

別の角度から見れば、インタビュー自体は、彼女にとっては、語ることによって、自分の過去や今の自分を整理し、再発見する行為であったことには間違いはないだろう。彼女の言う「レイプ体験」や彼女の性的遍歴を語ることで、サホはインタビュー中、落ち込んだり、涙を流したり、性的に興奮したりすることで、完全にではないにせよ、彼女の中の問題を整理・統合し、カタルシス（感情浄化）を行っていたのである。そのことが可能だったのも、「匿名の人物は本質的に脱道徳な人である」という言葉を援用すると、彼女にとって私は匿名的な人物であり、私が彼女の日常の生活空間とは全く無関係な存在であり得たからである。調査者はその触媒となっていた。ここに、データの収集だけではない、社会調査の新しい可能性が開かれると考えられる。

4.2 社会の中での自己の位置づけ

しかし、この点は古くから指摘されていたことである。インタビューを中心とする社会調査において、インタビュー調査そのものが調査対象者にカタルシスをもたらすことについて、E. R. バージェスは1930年に刊行された『ジャックローラー』の終わりにおいて次のように記述している。「個人のライフストーリーを話したり書いたりすることは、それ自身が治療の一部である。個人が経験を表出するまさにその行為は、カタルシスを起こさせる効果をもたらすだけでなく、とりわけ緊張や抑制が解かれた場合には、人生に対するその人自身の主体的なパースペクティブが与えられる。自己の経験にパースペクティブをもつことは、人が衝動や動機を統制して、なんらかの高い目標に向けて自力で運命を切り拓く重要な方法である」[Shaw, 1966=1998: 308]。

例えば、情報誌を媒介してインタビューすることになったある33歳の摂食障害の女性は、自分探しのために、インタビュー現場に登場している。「今日もね、話していくうちに、私はもっと知らない自分を見つけることができるかもしれないと思って、それで話してみようっていうふうに思ったので、取材に協力するというよりも私は自分のために、何か新しいことがわかればという風に（思って）」（セイコ、1998. 7. 10、33歳、専業主婦）。このケースでは、調査者は彼女の自分探しを援助する協力者に位置づけられる。

A. ギデンスは近代社会において日常生活を送る人々の誰もが抱く中心的な（focal）問いとして「私は何をすべきか？ どのように振る舞えばいいのか？ 何者であるのか？」[Giddens, 1991: 70]を挙げている。社会調査は、この点において、その調査活動を通じて、社会調査の結果を社会問題の解決や社会の進歩・発展、人類の幸福に寄与するだけでなく、現代社会に生きる個々人が抱える問題にも何らかの貢献が可能ではないだろうか。

4.3 変わりゆく社会調査

最後に、私が経験した宮古島の事例を紹介したい。先にも述べたが、現在、私は沖縄でダイビングに関するフィールドワークを行っている。宮古島

にはメインのフィールドとしている離島村との比較調査で行ったのであるが、そこでもおもしろい体験をした。車で空港まで迎えに来てくれたショップのスタッフは、東北地方の出身の二十代半ばの女性で、宮古島に来て三年目になるという。この話を聞いて、女性スタッフには名刺と自己紹介をし、インタビューを今日の夕方にも少しの時間だけでもさせてほしいと頼み、彼女からは一応の許可を得た。彼女へのインタビュー依頼の件はショップ・オーナーに伝えてほしいと頼んで別れた。もともとは、オーナー自身に明日インタビューを行う予定であったので、私は予定外の行動を取ったことになる。

ホテルについて電話をしてみると、オーナーの対応が芳しくない。女性スタッフの「プライベート」がとか言い始めて雲行きが怪しくなった。これはスタッフへのインタビューは無理だなと思って、ホテルでこれからどうしようかと考え、ゆっくりしていると、電話がかかってきて、「インタビューはOKだから、これからショップに来てくれ」とオーナーが連絡してきた。なぜ態度が急変したのかはわからなかったが、私はショップに向かった。そして、結果的には、その夜に女性スタッフへのインタビューは収集できたのであった。

翌日、オーナーとのインタビューを行っていると、昨日の出来事の顛末の説明があった。オーナーは、直感的に、「これは怪しい」と疑っていたのである。私の所属している大学なんて聞いたこともないし、「インタビュー」という名目で若い女性スタッフに近づこうとしているのではないかと思ったそうである。そこで、インターネットを通じて、名字の漢字が特殊なので苦労したらしいが、それが幸いして、私の名前の検索が可能となり、業績を調べ、私の顔写真が載っているページを発見し、女性スタッフに確認をさせたという。それで、オーナーの態度が一変し、インタビューが可能になったのだと説明してくれた。「名刺なんて、簡単に偽造できる」という言葉が印象的だった。もし私が無名の大学院生だったらどうなったのだろうかと考えさせられた。そして、感じたことは今後、社会調査は難しくなっていくだろうということだった。

現代日本社会において、社会が複雑化し、個人がさまざまな問題を抱える時代となっている。その反面で、プライバシーの保護や個人情報の管理が強固にされ、ますます社会調査は難しいものとなっていくだろう。調査倫理の徹底化が義務づけられるのもその証左である。

この意味において、私が行っている・きた匿名性を維持したインタビュー調査は現代の日本社会に適合的かもしれない。その理由は、特定の場所をもたない点と、相手の生活空間に踏み込まないという形でのプライバシーの保護という点、サホの事例のように社会現象の判断に関する境界線が曖昧になってグレーゾーンが多くなり当事者にとって他者の意見を秘密裏に求めたい要望に役立つ点、この三点においてである。今後、匿名性を維持したインタビュー調査は社会調査の手法として有効であると考えられる。

しかしながら、この方法自体は何も目新しいものではない。1920年代から、合衆国のシカゴを舞台に活動してきた社会学者たちが産出したモノグラフの中にすでにこの手法が見いだされるからである。その意味では、シカゴ学派に限らず、過去の社会学の遺産から多くの恩恵を受けている。だからといって全く同じものではない。これまで見てきたように、今回のインタビュー調査論は、現代日本という社会空間に適合的なものであり、当時のシカゴとは社会や個人のあり方が大きく異なっているからである。

調査方法論として見た場合、最大の欠点として挙げられるのは、匿名的な関係を前提としているので、事実確認や事後調査は難しいことにある。したがって、歴史的事実ではなく、当事者にとっての個人的真実を、ライフヒストリーでなく、ライフストーリーを収集するのに適合的な調査といえるかもしれない。この調査方法は、多くの課題を残しているが、今後調査方法としてより洗練させていきたいと考えている。

文献

Berger, P. & Luckmann., T, 1966, *The social construction of reality*, Garden City : Doubleday. (=1977, 山口節郎訳『日常世界の構成』東京：新曜社.)

Cressey, P. G., 1983, "A comparison of the roles of the 'sociological stranger' and the 'anonymous stranger' in field research," *Urban life*, vol. 12 no. 1, Beverly Hills :

- Sage publications : 102–120.
- Douglas, J. D., 1985, *Creative interviewing*, Beverly Hills : Sage publications.
- Giddens, A., 1991, *modernity and self-identity*, Cambridge : Polity Press.
- Goffman, E., 1963, *Stigma*, Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall. (=1980, 石黒毅訳『スティグマの社会学』東京：せりか書房.)
- 圓田浩二, 2001 a, 『誰が誰に何を売っているのか』西宮：関西学院大学出版会.
- , 2001 b, 「カタルシスと知的創造のインタビュー——方法論的考察」『社会学評論』第52巻1号(205号)：102–117.
- , 2003, 「沖縄テレクラ社会史——テレクラ規制がもたらしたもの」『沖縄大学地域研究所所報』第30号：121–132.
- , 2005, 「ダイビングの社会学——沖縄県座間味村を事例に」関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム『平成16年度研究成果報告書』「構造的差別を生きる人びとの価値観の多様性に関する研究」.
- Park, R. E., 1916, “The City,” *American journal of sociology* vol. 20, Chicago : Place of publication, 577–612. (=1965, 笹森秀雄訳「都市」鈴木広編訳『都市化の社会学』東京：誠信書房.)
- Schutz, A., 1964, *Collected papers II*, The Hague : Martinus Nijhoff. (=1991, 渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第3巻 社会学理論の研究』東京：マルジュ社.)
- Shaw, C. R., [1930] 1966, *The jack-roller*, Chicago : University of Chicago Press. (=1998, 玉井真理子・池田寛訳『ジャック・ローラー』東京：東洋館出版社.)
- Simmel, G., 1908, *Soziologie*, Leipzig : Duncker & Humbolt. (=1994, 居安正訳『社会学(下)』東京：白水社.)
- 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸, 1992, 『メディアとしての電話』東京：弘文堂.

The Social Survey Space without the Place : The Anonymous Intimacy and Interview Survey

Koji Maruta*

■Abstract

The purpose of this paper is to examine the relationship between social research and place based on survey experiences I call “interviews that maintain anonymous relations.” The interviewees are individuals who engage in paid sexual activities or both males and females with eating disorders. The interview surveys were not conducted in a particular location. Most consisted of a single session and were conducted in a format that maintained the informant’s privacy. The informants’ motivations for participating in the survey were divided into four categories : (1) their enjoyment of talking, (2) their desire want to help someone or society at large, (3) their own past and present situations, and (4) their interest in survey activities. This interview method can be an effective tool for people who have experiences that they cannot talk about in contemporary society. But isn’t the point that they can’t talk about it in everyday conversation (more so than they can’t talk about it in the current era)? . During the interview, what I call “anonymous intimacy” developed between the researcher and the informant, and taking advantage of this allowed the development of the interview as a form of communication. This interview format was unique in that over time it developed into an erotic medium of communication like pseudosexual intercourse. This suggests that interview surveys that maintain anonymity are an effective method of conducting social surveys. There are three reasons for this. (1) The interviews are not conducted in a particular locationplace. (2) They protect people’s privacy by keeping the researcher out of the interviewer’s living space. (3) There are a lot of grey areas in which judgments about certain social phenomena are difficult to make, and

*Okinawa University

these interviews were useful to the people who engage in those phenomena and who don't want others to know about their activities.

Key words : fieldwork, interview survey, anonymous intimacy, interview as pseudosexual intercourse